

吉井源太と明治

《19》

紙の王様、雁皮

紙の需要が増えるにつれて原料不足への心配が高まってきた。源太は原料増産の策にも心を砕いた。

楮は、クワ科の植物で、古くから用いられてきたもつとも代表的な紙原料。北国を除いて、ほぼ全国的に育つ。

繊維は強くて長い。これで漉いた紙はち密ではないが、強靱で、保存用紙にふさわしい。

「日本製紙論」では、楮の種類について、大きく分けて三種、それぞれに三種、合計九種に分けて細かく説明している。

それぞれの繊維とそれで作った紙の特徴、そして収穫量や原料にした時の歩留りなど。特に栽培の方法や刈り取りの際の注意が詳しく述べられている。

雁皮はシンチョウウゲ科で、やはり古くから用いられた紙原料だ。どちらかというと暖地に育つ。雁皮の紙は、非常に滑らかで強く、光沢がある。「紙の王」であると呼ばれることもあった。

源太が「日本製紙論」を書いたころには、輸出の主力であったコッピ紙の原料として貴重なものだった。これについても木の種類や特徴が詳しく述べられている。雁皮は栽培が非常に困難で、ほとんど不可能というくらい良いくらいという特徴がある。

明治九（一八七六）年に印刷局から矢吹享という人が、県下にある野生の莧花樹（雁皮の木）を視察に来たことがあった。当時、紙幣用紙の原料として考えら

れていたからだ。源太はその案内役を頼まれた。高岡、幡多の両郡を探索して大いに良品を得たと履歴書

に書いてある。また皮の精製法を付近の村人に伝えて、数百貫（二、三くらい）を印刷局に納め

たという。山中を広く探した回ったこの視察については、「大蔵省印刷局百年史」にも「その苦心たるや察するに余りあるものがあったろう」として源太の努力が賞賛されている。

では早い時期にこれらの薬品の知識を持つことができた。他の産地にも多少教えられたが、その知識を積極的に取り入れて活用し、大きな成果をあげたのは源太であった。

また次の年には、内務省が試作していた雁皮の木の鑑定を内務卿の大久保（利通）公から依頼された。上野公園へ行き、木が真正のものであると鑑定した。大久保公よりお褒めの言葉を賜い、王子村で酒肴をいただいた。この王子村というのは、印刷局抄紙部があったところだ。ここでは西欧からもたらされた化学薬品をいち早く取り入れて、紙幣用紙を作るための実験や研究が行われた。

雁皮は栽培ができず、原料確保の見通しが悪い。このために注目されるようになったのが、同じシンチョウウゲ科の三椏だった。寒地を除くところに生育し、明治時代に化学薬品の利用によって、良質な原料にする事ができるようになった。後には紙幣用紙製造のための原料として大量に必要になり、高知県からも「局納三椏」として納入されるようになる。

深い交流があったので、源太は民間の製紙業者とし

（京大大学院研修員、京都府在住）



初夏の雁皮（吾川郡いの町成山）